

106 長念寺の阿弥陀如来立像及び胎内文書



指 定 市有形文化財 平成9年2月20日  
 所在地 甲  
 所有者 長念寺

長念寺の阿弥陀如来立像は、昭和24年（1949）11月に、北佐久郡志編纂の基礎調査として、文部技官倉田文作氏を招聘して実施された北佐久郡川西地方各村の仏像調査のさいに、下原の長念寺の庫裏の仏壇からみいだされたものである。（与良清「長念寺文書」『信濃』昭和25年5月号）。

この立像について『北佐久郡志』第2巻は、「像高一尺九寸八分、寄木造、漆箔、本寺の庫裏に安置するいわゆる内仏である。肉髻は低目で、地髪部両側の張りが強く、螺髪は荒目に、髪際をゆるい波形とし、面奥が大きく、顎の張りが強く締まって、鎌倉中期通形の姿で、玉眼をはめこんでいる。両眼は切れ長でなく幅広で、背面の襟から肩にかけての肉どりが強い。衣文は像高に比してはなはだ力強く、稜立ちえり・右そで・下腹部などの刀技も小像ながら見るべきものがある」とのべている。

また、この立像の胎内から「仏舍利および舍利塔」「小形銅製舍利塔」「貞応文書 一」「文政願文 一」も発見された由で、このうちの貞応（1222～24）文書について、「その書体・文体および使用されている草名・切符などから、平安時代末、花押の発生以前の形式をうかがい得て、地方文献としても、古筆切としても珍重すべきものである」とのべている。その伝来の経過も含めて、今後の解明がまたれる。